

(2009-2011)

最近のシジュウカラガンと ハクガンの渡来傾向

千葉 晃*

はじめに

県内の平野や湖沼では、近年まとまった数のシジュウカラガンやハクガンの渡来が相次ぎ、愛鳥家の間で話題になった。例年厳冬期に実施される「カモ科鳥類の生息調査」にその一端を垣間見ることができるが、年1回・一斉・短時間という調査の制約上、必ずしも十分なデータ収集ができたわけではなかった。そこで、県内各地の湖沼で継続的に調査をしている方々にデータの提供をいただき、2009年～2011年におけるこれらの個体数をまとめ、動向を探ってみた。

個体数回復の取り組み

シジュウカラガンとハクガンは、共に新潟県版レッドデータブックに「絶滅危惧Ⅱ類」として掲載されている希少鳥種であるが、ヒシクイやマガンとは少し事情が異なっている。そこで、これらの個体数回復計画を実践してきた国際的な保護の取り組みについて、ごく簡単に紹介する。日本に渡来する千島列島産のシジュウカラガンは絶滅状態にあったが、仙台市八木山動物園が中核となり米露の協力を得て回復計画が立てられ、人為繁殖をベースとした「仮親方式」を経て、1994年エカルマ島(千島列島)で行われた「集団放鳥計画」が奏功し、今日に至ったものである(呉地2006、2010)。一方、ハクガンの個体数復元計画は1993年に着手され、繁殖地(ロシア北極圏のウランゲリ島)で採取した本種の卵を日本に渡る野生のマガン(仮親)にフ化させ、個体数回復を図ろうとしたものである。1994/95年には日本で少なくとも4羽が確認され、近年明瞭な増加が認められる。新潟県の平野部(低湿地・湖沼・水田)は、これら希少ガン類の越冬地として重要であり、渡来数をモニタリングし、保護に役立てる事は大切なことであろう。

シジュウカラガンの個体数と動向

2009/2010: この冬における県内の最大個体数は、12月4・7日に福島潟で記録された43羽であった。ここでは11月19日に1羽が湖内で初認され、11月23日に1群18羽、そして26・27日に35羽が数えられ、12月25日に観察された37羽の記録が終認となった。他の湖沼では本亜種の観察例が無く、朝日池で観察された1羽(10月30日11月5・30日)が唯一であり、この個体は亜種ヒメシジュウカラガンと判断されている。

2010/2011: この冬も福島潟には前年とほぼ同数の本亜種が渡来し、11月27日～30日に40羽が記録された。初認は昨シーズンより9日早い11月10日で、その時の数は8羽であった。個体数は11月27日に急増して40羽となり、群れの規模と渡来時期は昨シーズンとほぼ一致している。興味深い点は、12月に一旦福島潟で観察さ

* 新潟市西区寺尾東1-13-11

れなくなり、翌年1月16日～23日の間にまとまった数(25～37羽)で再び飛来した点である。1月下旬は降雪・低温が続き、ヒシクイ(亜種オオヒシクイ)は積雪を避け佐潟やその周辺へ移動するものが目立った。この動きに合わせるかのようにシジュウカラガンも佐潟と周辺の水田に現れ、2月1～5日に30羽～40羽の群れで観察された。2月1日には44羽(この年の最大数)が数えられ、その中にカラーリング付の2個体が含まれていることもわかった。これらはエカルマ鳥由来である可能性が高い。いずれにせよ、日本国内で確認された総数約90羽のうち約半数が本県へ飛来した点は、注目に値する。

ハクガンの個体数と動向

2009/2010: この冬におけるハクガン渡来数の最大値は上越地方の水田(1月2日中増田地区および1月16日長峰地区)で記録された34羽(成鳥18羽と幼鳥16羽)である。11月19日に朝日池で観察された22羽が初認であり、観察データから12月末まで朝日池を中心に越冬生活をしてきた様子が窺える。上越地方を除いた観察記録は福島潟に限られ、その数もごく少ない。すなわち、1羽が11月1日～12月13日の間にヒシクイ(亜種オオヒシクイ)の群れと共に行動していた様子が認められる。しかし、1月以降は観察例が途絶えた。

2010/2011: この年の初認は11月16日朝日池で観察された1群17羽である。11月下旬の足取りは極めて少なく、22日に柿崎地区の江島(水田)で観察された成鳥3羽が唯一の記録である。しかし、12月に入るとよくまとまった群れ(38羽)で再び飛来し、12月3日～19日の間は、朝日池や周辺の水田で生活して様子が確認された。しかし、福島潟など下越地方の湖沼や水田では、本種の記録が殆どなかった。つまり、ハクガンは主に上越地方(朝日池中心)で、一方、シジュウカラガンは下越地方(福島潟中心)で越冬生活をしている様子が窺えた。さらに、2011年になって興味深い事実が追加された。それは1月19日新潟市佐潟の周辺(赤塚地区の水田)でハクガンの1群30羽が、そして2月3日には近隣(上堰潟周辺の水田)で33羽が観察されたことである。この地域におけるこの時期の出現はどちらかと言えば異例であり、積雪と関連した越冬地間の移動もしくは採食地の変更・拡大を意味するものかもしれない。

なお、鳥屋野潟、瓢湖、および中之島(水田)では、これら2種の観察記録は得られなかった。

謝辞: データの提供をいただいたつぎの皆様に御礼申し上げます。齋藤敏郎、本間隆平、岡田成弘、佐藤安男、木下 徹、大原淳一、小川幸助、小川龍司、高辻 洋、ビュー福島潟(順不同)

文献

呉地正行(2006)シジュウカラガン・ハクガンの回復・復元計画の経過と課題. オンラインJOGA8.

呉地正行(2010)希少亜種シジュウカラガンの回復計画～復元・回復計画の経過、意義、今後の展開について～. オンラインJOGA13.



図5 クログモ

6. コシジロアジサシ

- 1) 観察日時：平成22年5月3日
 - 2) 観察場所：直江津小木航路（カーフェリー上）
 - 3) 観察者：今村 美由紀（情報提供 大原 淳一）
- 佐渡航路では県内初記録の鳥が何度か出現しているが、この鳥もそうである。太平洋側では春秋に見られるそうだが、日本海側の記録は珍しいと思われる。



図6 コシジロアジサシ

7. ホシムクドリ

- 1) 観察日時：平成22年11月
 - 2) 観察場所：上越市
 - 3) 観察者：大原 淳一
- 平成22年11月に県外の鳥屋がホシムクドリを発見し、その後上越の3カ所で見られていました。ホシムクドリも結構来てたのかもかもしれません。上越では初記録でした。



図7 ホシムクドリ

(2009-2011) 最近のシジュウカラガンと ハクガンの渡来傾向

千葉 晃*

はじめに

県内の平野や湖沼では、近年まとまった数のシジュウカラガンやハクガンの渡来が相次ぎ、愛鳥家の間で話題になった。例年厳冬期に実施される「カモ科鳥類の生息調査」にその一端を垣間見ることができるが、年1回・一斉・短時間という調査の制約上、必ずしも十分なデータ収集ができたわけではなかった。そこで、県内各地の湖沼で継続的に調査をしている方々にデータの提供をいただき、2009年～2011年におけるこれらの個体数をまとめ、動向を探ってみた。

個体数回復の取り組み

シジュウカラガンとハクガンは、共に新潟県版レッドデータブックに「絶滅危惧Ⅱ類」として掲載されている希少鳥種であるが、ヒシクイやマガンとは少し事情が異なっている。そこで、これらの個体数回復計画を実践してきた国際的な保護の取組みについて、ごく簡単に紹介する。日本に渡来する千島列島産のシジュウカラガンは絶滅状態にあったが、仙台市八木山動物園が中核となり米露の協力を得て回復計画が立てられ、人為繁殖をベースとした「仮親方式」を経て、1994年エカルマ島（千島列島）で行われた「集団放鳥計画」が奏功し、今日に至ったものである（呉地2006、2010）。一方、ハクガンの個体数復元計画は1993年に着手され、繁殖地（ロシア北極圏のウランゲリ島）で採取した本種の卵を日本に渡る野生のマガン（仮親）にフ化させ、個体数回復を図ろうとしたものである。1994/95年には日本で少なくとも4羽が確認され、近年明瞭な増加が認められる。新潟県の平野部（低湿地・湖沼・水田）は、これら希少ガン類の越冬地として重要であり、渡来数をモニタリングし、保護に役立てる事は大切なことであろう。

シジュウカラガンの個体数と動向

2009/2010：この冬における県内の最大個体数は、12月4・7日に福島潟で記録された43羽であった。ここでは11月19日に1羽が湖内で初認され、11月23日に1群18羽、そして26・27日に35羽が数えられ、12月25日に観察された37羽の記録が終認となった。他の湖沼では本亜種の観察例が無く、朝日池で観察された1羽（10月30日11月5・30日）が唯一であり、この個体は亜種ヒメシジュウカラガンと判断されている。

2010/2011：この冬も福島潟には前年とほぼ同数の本亜種が渡来し、11月27日～30日に40羽が記録された。初認は昨シーズンより9日早い11月10日で、その時の数は8羽であった。個体数は11月27日に急増して40羽となり、群れの規模と渡来時期は昨シーズンとほぼ一致している。興味深い点は、12月に一旦福島潟で観察さ

* 新潟市西区寺尾東1-13-11

れなくなり、翌年1月16日～23日の間にまとまった数(25～37羽)で再び飛来した点である。1月下旬は降雪・低温が続き、ヒシクイ(亜種オオヒシクイ)は積雪を避け佐潟やその周辺へ移動するものが目立った。この動きに合わせるかのようにシジュウカラガンも佐潟と周辺の水田に現れ、2月1～5日に30羽～40羽の群れで観察された。2月1日には44羽(この年の最大数)が数えられ、その中にカラーリング付の2個体が含まれていることもわかった。これらはエカルマ島由来である可能性が高い。いずれにせよ、日本国内で確認された総数約90羽のうち約半数が本県へ飛来した点は、注目に値する。

ハクガンの個体数と動向

2009/2010: この冬におけるハクガン渡来数の最大値は上越地方の水田(1月2日中増田地区および1月16日長峰地区)で記録された34羽(成鳥18羽と幼鳥16羽)である。11月19日に朝日池で観察された22羽が初認であり、観察データから12月末まで朝日池を中心に越冬生活をしてきた様子が窺える。上越地方を除いた観察記録は福島潟に限られ、その数もごく少ない。すなわち、1羽が11月1日～12月13日の間にヒシクイ(亜種オオヒシクイ)の群れと共に行動していた様子が認められる。しかし、1月以降は観察例が途絶えた。

2010/2011: この年の初認は11月16日朝日池で観察された1群17羽である。11月下旬の足取りは極めて少なく、22日に柿崎地区の江島(水田)で観察された成鳥3羽が唯一の記録である。しかし、12月に入るとよくまとまった群れ(38羽)で再び飛来し、12月3日～19日の間は、朝日池や周辺の水田で生活して様子が確認された。しかし、福島潟など下越地方の湖沼や水田では、本種の記録が殆どなかった。つまり、ハクガンは主に上越地方(朝日池中心)で、一方、シジュウカラガンは下越地方(福島潟中心)で越冬生活をしている様子が窺えた。さらに、2011年になって興味深い事実が追加された。それは1月19日新潟市佐潟の周辺(赤塚地区の水田)でハクガンの1群30羽が、そして2月3日には近隣(上堰潟周辺の水田)で33羽が観察されたことである。この地域におけるこの時期の出現はどちらかと言えば異例であり、積雪と関連した越冬地間の移動もしくは採食地の変更・拡大を意味するものかもしれない。

なお、鳥屋野潟、瓢湖、および中之島(水田)では、これら2種の観察記録は得られなかった。

謝辞: データの提供をいただいたつぎの皆様は御礼申し上げます。齋藤敏郎、本間隆平、岡田成弘、佐藤安男、木下 徹、大原淳一、小川幸助、小川龍司、高辻 洋、ビュー福島潟(順不同)

文献

- 呉地正行(2006)シジュウカラガン・ハクガンの回復・復元計画の経過と課題。オンラインJOGA8。
 呉地正行(2010)希少亜種シジュウカラガンの回復計画～復元・回復計画の経過、意義、今後の展開について～。オンラインJOGA13。

長岡市信濃川における

オジロワシの保護対策の一例

横山美津子*

【はじめに】

旧長岡市の信濃川で越冬する番いのオジロワシの行動圏は越路橋から蔵王橋の約10kmにおよぶ。これをA・B・Cの三つのエリアに分けて観察している。最上流部(越路橋～長生橋)のAエリアは浅瀬が広がり最も面積が広い。しかしオジロワシの利用時間は越冬期間を通してみると比較的少なく、利用が多くなるのは2月頃からである。この頃になると番いの絆が深まり、雄が捕った餌を雌に渡す求愛の餌捕りが多くなるが、捕獲する餌は魚が多いのが特徴である。瀬の発達したAエリアは魚が捕り易いのかもしない。Aエリアから下ったBエリア(長生橋～長岡大橋)は、市街地に近く止まり木のある左岸の河畔林は薄目ではあるが低水路にあるため人がほとんど入ることがない。河川敷はグラウンドなど整備された平場が広がり、8月に行われる長岡花火会場としても使われる。最も下流に当るのがCエリア(長岡大橋～蔵王橋)である。このエリアの左岸は河畔林が発達し、オジロワシが止りやすい枝をもつシロヤナギなどの高木が川辺にある。林床はノイバラなどの藪が生い茂り人の入らない安心できる環境なのだろう、かつては番の時に利用されたこともある。Cエリアは探餌や採餌の他に2羽が罠入りの時間まで「過す」という使われ方が多く、他のエリアから戻った1羽とこの止まり木で合流してから2羽そろって罠(現在は東山)に向うのを何回も見ている。B・C二つのエリアが平成9年に銃猟禁止区域に指定されカモ類が集結していることもここに定着させている要素の一つと考えられる。

【河川工事に伴う保護策】

平成9年度の観察以来、毎年一組の形でオジロワシの飛来は継続しているが、流下能力確保等による河畔林の伐採や河川改修などによって各エリアの環境はかなり変容している。中でも平成18年度に始まったAエリアの東西道路架橋工事は、その影響を心配したが建設現場から上流1kmの局所範囲で番いが餌を捕っているのを確認した。しかし19年度の越冬期にはAエリアを越えた越路橋上流1km地点で2羽のオジロワシを発見しているので工事の影響かもしれない。

平成20年度にBエリアの低水路の堆積土砂を採って、堤防の強化と市民の散策・長岡花火観覧のための堤防傾斜緩和に使う盛土工事が始まった。国土交通省信濃川河川事務所宛てにオジロワシの利用木があるのですが・・・と、止まり木のアピールをしたところ工事の説明をしたという返事がきた。この件では渡辺愛護会会長の方へも河川事務所から連絡を入れている。三者の話し合いで出した結論は、水際の止まり木を含めて出来る限り止ま